

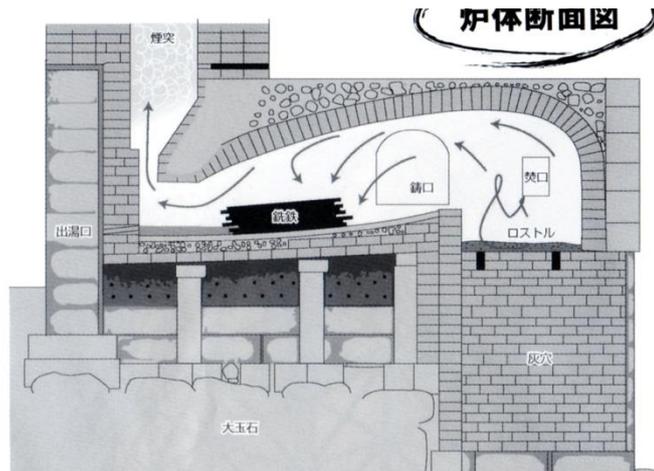
【雑学】世界遺産・韮山反射炉・江川邸を訪ねて

伊豆長岡の「小松屋八の坊」で大学時代のクラブミニ OB 会が開催された。六十代後半から七十代の OB・OG（高齢者？）計 15 名が参加、宴会も盛り上がりすっかり酔っ払ってしまった。翌日は韮山反射炉と江川邸の見学である。OB 会に先立ち、三島 CC で初代から四代までの各学年会長経験者 4 人でゴルフをしたが、思えば初体験である（スコアは黙）。

《韮山反射炉》静岡県伊豆の国市中字鳴滝 268

韮山反射炉は昨年（平成 27 年 7 月）「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼・造船・石炭産業」として世界遺産に登録された 7 県にわたる 23 ヶ所の一つである。ここ韮山反射炉（静岡県伊豆の国市）と橋野鉄鉱山・高炉跡（岩手県釜石市）を除く 21 ヶ所は長崎県（8 ヶ所）、鹿児島県（3 ヶ所）、福岡県（4 ヶ所）、佐賀県（1 ヶ所）山口県（5 ヶ所）の西日本に偏在している。特に長崎に多いのは江戸幕府の開港地であったことと、外国の植民地化に危機感を持つ開明的藩主のいた西国の雄藩、鍋島藩（佐賀）、薩摩藩（鹿児島）、長州藩（萩）が海岸防備力強化に大砲製造を目指したことによるようだ。

幕末期から明治初期、列強の植民地化を免れるため外国からの資本輸入に頼ることなくほとんど自力で進められたこの産業革命は、西洋の科学技術と日本の文化が混じりあうことで加速し、産業の飛躍的な発展を遂げた。これは世界でも極めて稀なことであったようだ。前置きはさておき、韮山反射炉は、第 36 代江川太郎左衛門英龍が幕府に進言した海防政策（西洋砲術の導入、鉄製大砲の生産、西洋式築城術を用いた台場の設置、海軍の創設、西洋式の訓練を施した農兵制度の導入など）の一つとして鉄製大砲を製造するための幕府の必要施設であった。



反射炉と江川英龍像、反射炉の断面図。高温に耐える煉瓦とコークスが必要とされる。

何故、韮山に反射炉？当初伊豆下田港に近い本郷村（現下田市）に作る予定で基礎工事も行われたようだ。ペリーの来航により下田が開港され、外国人の遊歩地域に入ったため、外国人の目に触れ難い場所、また海岸から離れず遠からずの場所として天城山地の反対側の韮山が選ばれ移設されたようだ。韮山が江川英龍代官の目の届く場所としての理由もあったのでは？ 江川英龍は、反射炉の完成を見ることなく安政 2 年（1855）に世を去った。跡を継いだ息子の英敏が製造を進め、安政 4 年（1857）炉を完成させた。



ガイドの説明を熱心に聞く私たちと铸造された大砲のレプリカ



当 OB 会の S 幹事は用意周到、午前 9 時よりの、ガイドボランティアを予約済みで、製鉄に必要な耐火煉瓦の製造、コークスの製造、反射炉の操作手法、大砲の鑄造法（鑄型は縦置き）、水車動力による砲身のくり貫き旋盤などの詳しい説明を聞く私たち。

反射炉だけで大砲が出来るわけではなく、鉄鉱石の探査、耐火煉瓦の原料研究と製造、石炭を蒸焼きにしたコークスとタール（防錆剤として使用）製造の施設及び貯蔵庫、水路を引いた水車動力、砲身くり貫き旋盤作成の鍛冶小屋、砲身の仕上げ小屋、作業員の宿舎など総合的な施設が設置されていたようだ。

《江川邸・葦山役所跡》静岡県伊豆の国市葦山 1 番地

江川家は清和源氏の流れをくみ、源満沖の二男宇野頼親を家祖としている。6 代親治が保元の乱（1156 年）を避けて、伊豆の葦山に定住したと伝えられている。その後鎌倉時代、室町時代と伊豆の豪族として地盤を固め、15 世紀中頃に、狩野川の支流の名にちなんで、姓を江川と改めた。28 代英長は徳川家康に仕え、伊豆が幕府の直轄地になるに及んで、代官としてこの地を統治することになった。江戸時代のほぼ全期間を通じて代々徳川幕府の代官を世襲して勤めた（入館パンフレット参照）。



江川邸（葦山役所）

NHK の大河ドラマ「篤姫」の嫁入りシーンに薩摩藩の江戸屋敷として撮影にロケで使われたようだ。

屋敷横の別棟には、現在、江川家子孫の方がお住まいになっているので、そちらの方へは一般人、立ち入り禁止となっている。

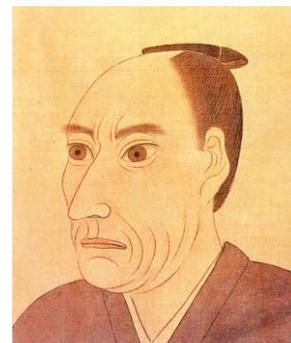
主屋（552 m²）は高さ 12m 余の大屋根を支える豪壮な架構で有名。主屋は 1958 年、国の重要文化財に指定された折、解体修理が行われ、それまで茅葺であった大屋根が現在の銅板葺きに変更された。

S 幹事は丁寧にも、合わせて江川邸の説明ボランティアも予約済みであった。



江川太郎左衛門英龍（坦庵）

徳川家康は政権を取ってから江戸城を囲む東海道筋、甲州街道筋、中山道筋、奥州街道筋の約 100k m 以内は防御の為、直轄領（通称天領）や小大名領地とした。東海道筋は最も西国からの防御すべき街道として、江戸から箱根の関所までは小田原藩（大久保家）を除き旗本の知行地や幕府直轄領とした。直轄領（天領）には徳川家の家臣を代官又は奉行として管理させている。前にも述べたように歴代、伊豆韮山代官・江川太郎左衛門は幕末まで武蔵国南部（今の三多摩・川崎・横浜）・相模国（今の神奈川県西部）・伊豆国を治める最も幕府が信頼せる代官中の代官であった。



英龍自画像

さて 36 代江川太郎左衛門（英龍）は幕末の激動期に韮山代官を勤めるだけではなく、外国からの侵略を防御するためには如何すべきか防衛技術を研鑽し、海防計画、鉄製大砲の製造（韮山反射炉の設置）、組織的近代軍隊（農兵隊）の設立等、幕府中枢に提案せる優秀な技術官僚でもあった。農兵隊は江川太郎左衛門が管理する今の三多摩の各村々でも組織化、訓練がなされている。農民と武士の境目が薄れ、南多摩（日野宿）より農民の子弟であった近藤勇、土方歳三（佐藤彦五郎義弟）など浪士隊と称するグループが発祥する切っ掛けともなったようだ。

農兵隊を運用するに当たり、隊列を整えるため「の一え節（農兵節）」の作詞作曲、携行食糧として「パン（カンパン?）」の試作などを行っている。坦庵はパン祖としてパン食普及協会が、これを記念し 4 月 12 日をパンの日として、1983（昭和 58）年に制定している。

《参考資料》

1. 「幕臣たちと技術立国—江川英龍・中島三郎助・榎本武揚が追った夢—」 佐々木譲 集英社新書（2006 年）
2. 「江川太郎左衛門の生涯（日本の国防に一生をささげた韮山代官）」 堀内永人 栄光出版社（2013 年）
3. 「幕末の知られざる巨人江川英龍」 橋本敬之 角川 SSC 文庫（2014 年）
4. 「近世前期における多摩郡の地域構造」 齊藤 司 多摩のあゆみ 113 p8~21 財団法人たましん地域文化財団（2004 年）